



Title	無題
Author(s)	上松, 衡川
Citation	懷徳. 1927, 6, p. 50-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88746
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



上 松 衡 川

故磐舟翁を追憶して得た所の記述を試みよとのことであるが、翁と吾輩とは其環境も社會上の地位も極度に違ふ、其上に其人格が餘り大いので盲人の撫象である、翁と吾輩との交渉は翁が懷德堂記念會の理事長で、吾輩が同會の幹事といふ此間數年の事で、從て何事も此時代と此間柄で小さき場面に極限さるゝ事である。

吾輩の追懷は何よりも翁の温乎たる風貌とからくした心情に憧憬するにはじまる、翁は常にニコ／＼もので少しも城壁を構へず、万事氣輕るに親しみを健か與へて呉れられた、其様して吾輩が何を言つてもソレモノデヤとかソレモヨカラウとかの返辭より外に餘り變つた挨拶を聞かせられなかつた、其辯それで總てに肯諾を與へて居らるゝかといへは左様ではない、併し其語尾の上がり下がりで翁の眞意は推斷することが出來た、而かもそれで吾輩は決して少しも不快の感は持たなかつた、其處にいひしれぬ翁の靈光のひらめきが有つたのであらふ様におもはるゝ、免角翁は吾輩にものを強ひるといふ

ことはなかつた。

外部に對する交渉でもさせ様とする時には、先方は斯様々々にいふて居るが、それでは困るから其處宜き様にといふ風で、自分の意見を一寸はのめかすまでにして斯く／＼に計らへとは決していはぬ人であつた、想ひ起す大正二年の頃で一時ゆき惱みであつた、懷徳堂重建資金募集の最も困難を感じ最も焦心で居つた際、ある日吾輩に向ひ、金額は極つて居らぬが内話丈は遂げて置いたから、高倉藤平氏を訪問し喜捨金を貰つて來る様にと命ぜられた、算了何程と切り出さば可しかるべきかと問ひつめた答には一萬圓の一言であつた、時が時々たとの感じは幾度も幾度も此身を小宮町の同氏の邸に運ばしめた、いつも不在々々、併し一萬てふ一言に釣られ六七度目に稍く初對面の高倉氏に相逢ふことが出來た、氏は流石にキビ／＼した人で有つたと今も深く腦裏に刻まれて居る、氏は吾輩の來意を聞くなり按の條に、喜捨金は何程を求めらるゝやの一問此方が餘り蟲がよさするので泊瀬のこもりくにはあらねど一寸口こもりしたが、おもひ切つて一萬圓の一矢を放した、そは餘り多額に過ぐ、また／＼の事にして、今日はと金五千圓の寄附申込書を認めてポント渡されたには、返す言葉も何にも覺えず鬼の首をの感をなして歸いつたことがある、思ふに翁が幾度も幾度も高倉氏に會談しそれとは云ひ出さずて喜捨金の額を釣り上げさせ／＼して宜しき程あひの汐時を吾輩に示されたことで氏が懷徳堂重建その物に共鳴せられての事ではない、此類の事は幾度も／＼も繰返された、此一事を以てして

も翁は其相手の上下を問はず、決して物を強ひることはせぬが何時とはなしに吾方に引き付くる、一種不可思議なる靈光の所有者であつたことが知らるゝ。

重建懷德堂に就ては、理事諸君をはじめ絹士紳商の力を盡されたる所の大なることは、世人の等しく之を認め學海の爲に感謝して措かざる所であるが、特に翁の陽に薄くして陰に厚く、有形的に無形的に其盡されたりし事は、懷德堂先賢の靈よく明鑒し給はん、人間の筆と舌もてしてはいひあらはしがたし、重建懷德堂たるもの果して何を以て之に答へんとするか、アゝ今や翁在さず嗚呼。（昭和二、九、二）

故永田理事長故松山教授を憶ふ

今 井 貫 一

故永田仁助翁は大正二年懷德堂記念會創立以來の理事長、故松山直藏博士は大正五年懷德堂開講以來の教授でありました。申すまでもなく理事長と教授とは懷德堂の最も重要な任務であるが、兩君は多年共に此重任に當られ、容易ならざる苦心盡力を爲されて懷德堂事業の擴充發達を圖られたのであります。私は記念會の初めから理事の末席を汚し、常に兩君に親炙して居りましたから、十有餘年